

日本人の考えた動物霊

千葉 徳 爾

-
- | | |
|---------------|-------------|
| 1. 序 論 | 4. 霊の作用 |
| 2. 人や動物に霊はあるか | 5. 野獣霊力の体系化 |
| 3. 霊という言葉の基準 | 6. 前説の再検討 |
-

論文要旨

本稿では、猟師という野獣を殺す立場の人びとや、動物を育て利用してきた人びとの意識・伝承・習俗などを通じて、それらの霊がどのように日本人の中で考えられて来たかを検討する。

ここでは当然、自然科学的に論ずるのではなく、人間が動物の霊に対しどう思っているのかという立場で論ずる。筆者はそれを前提として、これまでの日本人の認識として、人の靈魂や野獣もしくは家畜に霊と呼べるものが見出せるかという問題に迫る。それを基層信仰として単に観念上のものとするか、それとも具体的な証拠あるものとして考えるのかが、筆者の一つの課題となる。

人間の霊と動物の持つ霊とは伝承される民俗の質、量などからみて、性質の異なるものと判断した方がよい。それゆえ、定義として性質の異なるものを、同じく霊として同一の名のもとに呼ぶことは本来は不可能である。人の霊と動物霊とは多分に性質を異にするとともに、動物霊一般というものも認識としては存在し難く、人にも野獣にも、またその中間の家畜にもあてはまるような、これまで使ってきた霊という概念とあまりかけ離れない形での共通な基準を、まず立てねばならない。

動物の霊の表出の仕方、あるいはそれを人間が霊として認識する方法については、人間の霊の表出の仕方と異なり、「タタル」という、形を現さず作用した結果だけが認められる場合が多くなる。一方、人の霊と獣の霊とは身体を失っても存在しつづける点は共通であり、怨みや願望の無い霊は出現しないことも同様で、何かを望んで現れる霊の表現する方法には人と獣とに必ずしも同じ形が用いられるとは限らない。